

日本語の多様性と普遍性の探求

国語教育講座・助教

前田 広幸

■研究紹介

私の専門は日本語文法、音韻論です。特に近年は、文法と音声のインターフェース領域に興味をもっています。

もとは敬語、否定、とりたて等、文法分野を中心に論文を書いていました。ところが「TR」という共同研究機関で当時、自動翻訳電話と呼ばれていた技術の研究を行なう中で音声研究者と交流する機会があったことや、イギリス・エセックス大学での在外研究中に音韻論者I・ロカ氏と出会ったことなどをきっかけに、音声・音韻分野への関心が高まり現在に至っています。

ここ数年の間に成果をまとめたといえ、現在おもに取り組んでいるのは、平曲譜本（琵琶を弾きながら平家物語をかたる語り方を符号により注記した文献）中の譜記から古い日本語のアクセントやイントネーションを再構築する試み（金田一春彦や奥村三雄らによるすぐれた先行研究がある）を、現在の音声研究の知見を生かすことにより、さらに発展させようとする研究です。



共同研究者との討議の様子

■共同研究の近況

現在、分担者・協力者として参加している共同研究としては、「日本語史の理論的・実証的基盤の再構築」および「日本語の対人配慮表現の多様性」をテーマにしたものがあります。前者は今年度が最終年度で、その成果を4巻のシリーズ本としてまとめるべく現在、分担執筆・編集者の一人として、取り組み中です。また後者は昨年度スタートした共同研究（平成二十年年度まで）で、ちょうど研究も佳境にさしかかり毎年2回ずつ開いている合宿での議論もますます熱をおびてきています。

■研究室の近況

今年の春、学部生一人、院生二人（二人は奈良県の小学校教員、二人は進学の道を選びました）を送り出し、現在の研究室は、私以外に、学部生二人、院生二人、研究生二人からなる、こじんまりとした構成です。日本語の多様性と普遍性に興味のある方は気軽に一度遊びにきてみてください。

立場は変わっても

数学教育講座教授

吉田 明史

■私の背景

高等学校教員を17年、行政を14年（県及び国の合計）担当し、本年度、奈良県教育委員会事務局学校教育課から着任しました。

専門は数学教育です。文部科学省での五年間は、数学教育の価値を訴え続け、「創造性の基礎を培う数学教育」を旗印に、現在の中学校と高等学校の数学の学習指導要領の改訂に携りました。また、各学校の数学の先生や全国の教科担当指導主事の先生方には、「教



授業風景

えるほど算数・数学嫌いにさせている現状は、指導者の責任として厳しく受け止め、数学教育の陶冶的側面もしっかり見据え、数学学習の大切さを認識できるように指導してほしい」と訴えていました。この人間形成の視点から見た数学教育の在り方については、今も機会あるごとに話しているところです。

■大学での私の仕事

本学では、数学科の教員養成にかかわる授業（中等教科教育法、数学教育講究、数学教育論）を担当したり、教員養成の在り方を考えたりすることとなりました。授業では、算数・数学を教えることが楽しいという経験を積んでほしいと思っています。また、問題を解くことだけに夢中だった自分を見直し、教えるという視点から数学を学んでほしいと思っています。さらに、教職に就いて情意面の改善と数学的思考力・表現力の向上を意図して、コンピュータ等を活用した算数・数学の授業が展開できるようにしてほしいと願っています。一方、本学が目指している教職大学院大学のカリキュラム編成等にもかかわり、教科を超えて、期待される教師像は何かを考えるいい機会になっています。

大きな変革の時期に勤務し、立場は変わっても、目指す方向性が同じことに充実感を味わっている日々です。

健やかな食生活を 送っていますか？

生活科学教育講座・教授
大家千恵子

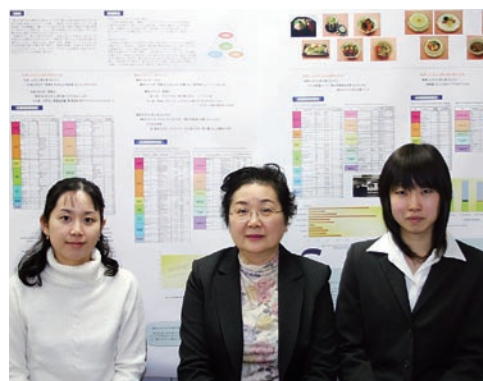
■教育について

近年、食生活を取り巻く社会環境の変化などに伴い、偏った栄養摂取などの食生活の乱れ、肥満や痩身などが見られており、増大しつつある生活習慣病と食生活の関係も指摘されている。また、食の安全、食の海外依存、伝統的な食文化の喪失も問題視されている。このような背景の下で、平成17年6月に「食育基本法」が制定されました。

教育の三本柱である「知育」、「徳育」、「体育」に加え、「技育」の四本柱の基礎として「食育」が位置づけられなければならないと考えています。「食育」とは、様々な経験を通して「食」に関する知識と「食」を選択する力量を得し、健全な食生活を実践することができる人間を育てることであると思います。そのために食育の手法を開発するには「食科学の推進」が重要であり、それを教育現場に活かすことを目標としています。

■研究について

20世紀は大量消費、大量廃棄の時代



ゼミ学生と研究室で

と言われ、消費することが美德とまで言われてきました。しかし、21世紀に入り地球の資源が枯渇し、さらに温暖化が大きな問題になっています。私達人間の生きるものとなる「食」も環境問題を避けては通れません。これからはこの地球の限界を定量的に把握し、人間活動と調和させ、かつ整合性を高めつつ持続可能な発展を目指す時代です。それゆえ、日常の生活活動も環境に与える負荷を少なくすることが求められています。市民レベルのライフスタイルの見直しが必要となっています。

私の研究は食生活の中で、地球温暖化の原因の一つであるCO₂排出を減らす献立の工夫、提案をしています。具体的に献立における食材の生産、輸送、調理、廃棄のライフサイクル全体のCO₂排出量について定量し、その削減のための提案を考えています。

学校における 豊かな人間関係の 構築を求めて

教育実践総合センター・助教授
池島 徳大

■研究室の状況

池島研究室には、学部生(3名)と院生(4名)の計7名が所属しています。院生の中には、現職教員(昼・夜間)と教員経験者が3名在籍しています。

■研究テーマ

私は、もともと公立学校の教員からスタートし、その後、県と国の教育研究機関を経験し、本学へ転任してきました。

私は、日本の学校教師に必要なスキルとして、次の3つのスキルの獲得を提案しています。「友だちづくり (Be friending) スキル」、「傾聴 (Active listening) スキル」、「対立解消 (Conflict resolution) スキル」の三つです。このうち、現在最も関心のあるテーマは、「フィールドベースの対立解消プログラムの構築」です。日常的に起こる子ども同士のもめごとやいじめなどの対立問題に対して、当事者同士が「Win-Win (勝ちー勝ち)」法で問題解決を図っていくスキルの開発を目指しています。

■問題解決能力がますます求められる日本の教師

学校現場では、子どもの対人関係能力の未熟さから、ちょっとしたことでめたりキレたりするなどのトラブルが少なくありません。いじめや不登校の要因にもなり得ます。そこでメディアエーター(調停役)である先生の登場となるわけですが、その助け船が効を奏せず先生と当事者あるいは保護者との問題にすり替わってしまうことも珍しくありません。対立問題に対して、当事者双方が納得した上で解決できる方法を学んでおくことは、教員養成において極めて重要なスキルです。なお、関連して、子どもたちが自分たちで問題を解決したり助けあったりしていく相互扶助システムとしての「ピアサポート・プログラム」の学校教育への導入も検討しています。



研究室で学生と

